

宮古狩俣方言の結果相 *ufu* の文法化 —統語と意味のミスマッチ— 衣畑智秀（福岡大学）

tkinuhata@cis.fukuoka-u.ac.jp

【要旨】この発表では、文法化において、統語変化よりも意味変化が先に起こることを宮古狩俣方言の事例から示す。この方言の *ufu* は結果相を表すアスペクトの用法と推測を表すモーダル／エヴィデンシャルな用法があり、「スコープの拡大」が文法化において起こるといふ仮説から、前者から後者へと変化が進んだと考えられる。結果相用法は達成動詞・活動動詞とのみ使われるのに対し、推測用法は到達動詞・状態述語とも使われ、推測用法はモーダルな意味に加えて、出来事を発話時以前に位置付けるテンスの意味も発達させている。このような発達にもかかわらず、*ufu* は統語的には結果相用法と同じアスペクトのスロットに留まっている。

1 はじめに

近年の文法化研究における仮説の1つに、文法変化は「スコープが拡大 (scope-increase)」することはあるが、スコープが縮小することはない、というものがある。この仮説は、以下のような動詞複合体がある時、動詞に近い要素から遠い要素へは変化するが逆はない、という予測が立てられる。

- (1) [... 見] られ] てい] た] だろう]
 [... 動詞] ヴォイス] アスペクト] テンス] モダリティ]

この仮説は、機能談話文法 (Hengeveld 2011, Hengeveld 2017)、生成文法 (Roberts and Roussou 2003, van Gelderen 2004)、役割参照文法 (cf. Narrog 2012, §3.3.1) などで議論されているが、そこでのスコープの概念は異なっている。すなわち、機能談話文法では state-of-affairs, episode, proposition などの意味概念をスコープの定義に用いているのに対し、生成文法でのスコープは統語的概念である。これに対し本稿では、このスコープが拡大する変化において、統語変化と意味変化が同時には起こらず、この現象を理解するにはその両面を考慮しなければならないことを論じる。

さらに、この変化では統語的位置の変化よりも、意味変化が先んじることも示す。これまでも、文法化研究において意味変化が形態統語的变化よりも先に起こることはしばしば指摘されてきたが、それらは意味と形態の関係であったり (Haspelmath 1999, §4.4, Heine and Kuteva 2002, 3-4, Hopper and Traugott 2003, §5.1 etc.)、意味と統語範疇の関係であったり (cf. Francis and Yuasa 2008, Denison 2010, §2.1) した。本稿では、意味と統語的「位置」の関係にもこのズレが生じることを、宮古狩俣方言の共時的な文法記述から示し、この文法化の過程は純粹に統語的な観点から説明することが難しいと結論する。

2 宮古狩俣方言

宮古狩俣方言は、沖縄県宮古島市の本島北部にある狩俣集落で話される、宮古方言群に属する方言である (衣畑・林 2014)。宮古語の他の方言と比較しても、狩俣方言を話す話者は高齢化しており、より消滅危機の度合いは高い。そのため多くの話者との調査は難しく、データは 1933 年生の女性 (F₁₉₃₃) との対面調査を中心にし、他 2 名にも確認としての調査を行った (F₁₉₃₄, M₁₉₄₂)。また合わせて発表者が作成した自然談話の例も用いる (F₁₉₂₄, M₁₉₂₆, F₁₉₂₆, F₁₉₃₄)。

3 動詞複合体の構造

宮古狩俣方言の動詞複合体の構造は、日本語のそれとよく似ている。本発表に関係する範囲で、動詞複合体に現れる文法カテゴリの構造を示すと次のようになる（「モダリティ」は認知的）。

- (2) [... [... 動詞] アスペクト]-敬語]-否定]-テンス]=モダリティ]

次は、この相互承接を部分的に例証している。

- (3) a. kisi ur-ama-an=riba 「着てはおられないので」 (F₁₉₃₃)
 wear PROG-HON-NEG=CSL 「アスペクト-敬語-否定」の連続

b. (mmida) owara-ddan=padzi 「(まだ) 終わらなかったはず」 (F₁₉₂₇)
 (yet) finish-NEG.PST=CONJEC 「否定. テンス=モダリティ」の連続

c. izz-ari u-tai 「叱られていた」 (F₁₉₂₇)
 scold-PAS PROG-PST 「アスペクト-テンス」の連続

さらに、(2)のアスペクトのロットは、その内部が(4)のように分かれている。

(4) [... [... 動詞] アスペクト₁] 受益] アスペクト₂ [...]

たとえば始動相を表す *padzimi*、受益を表す *fii*、進行を表す *ui* はこの順序で現れる。

(5) panasi padzimi fii ui 「話し始めてくれている」
 speak start give PROG

次節でその意味特徴を記述する *ufu* は、*ui* とともにアスペクト₂ のロットを占め、これらが共起することはない (*uri* は *ui* の、*uki* は *ufu* の屈折形の1つ)。

(6) *panasi uri ufu / *panasi uki ui

4 *ufu* の結果相用法と推測用法

4.1 結果相用法

ここでは同じアスペクト₂ のロットを占める *ui* と比較しながら、*ufu* の意味を記述する。前者は有生物の存在を表す本動詞としても使われ、日本語の「いる」に近い文法化が起っている(ただし違いについては衣畑 (2018) 参照)。一方後者は日本語との音韻対応から「置く」に由来すると考えられる。これらが文法化したアスペクトの用法は表1のようにまとめられる。以下それぞれの用法を動詞分類に従い順に見て行く。

表1 Aspectual usage of *ui* and *ufu*

	達成	活動 + 意志 - 意志		到達	状態
<i>ui</i>	進行	進行	進行	結果	(進行?)
<i>ufu</i>	結果	結果	(結果)	—	—

達成動詞 (Accomplishment verbs) は意志的に動作を行う主体を主語とし、動作の対象を目的語とする。このタイプの動詞に *ui* が使われた時、主体の動作が行われている最中であることを表し、対象の変化結果は含意されない。一方、*ufu* が使われると、動作が完了したことを意味し、結果として対象の変化結果が含意される。つまり、*ui* が進行相、*ufu* が結果相を表すという対立が見られる。

(7) a. ba=a nnama=du satapanbin=nu agi **ui**.
 1SG=TOP now=FOC doughnut=ACC fry PROG
 「私は今サタパンピンを揚げています。」

b. ba=a nnama=du satapanbin=nu agi **ufu**.
 1SG=TOP now=FOC doughnut=ACC fry RES
 「私は今サタパンピンを揚げた(揚げてある)。」

なお、パーフェクトを表す場合でも *ufu* は変化した対象の存在を含意する結果パーフェクトの解釈となり、経験パーフェクトの解釈を得るには経験を表す *miii* が必要になる(用語はComrie 1976, Ch. 3)。

(8) baa nnama=taasja=a miin=du satapanbin=nu agi mii **ufu**.
 1SG.TOP now=by=TOP three.times=FOC doughnut=ACC fry EXPR RES
 「私は今までに3回サタパンピンを揚げたことがある。」(経験パーフェクト)

活動動詞 (Activity verbs) は動作を限界づける対象を持たないが、動作の主体に言及することで、進行相と結果相の違いが得られる。*ui* が活動動詞に付くと、達成動詞の場合と同じく主体の動作が行われている進行の解釈になる。一方、*ufu* が付くと動作の完了を意味し、結果の状態は通常、主体の能力((9-b)では話し手の踊る能力)として実現する。

(9) a. nnama=a budui=nu rensjuu asi **ui**.
 now=TOP dance=GEN practice do PROG
 「今は、踊りの練習をしている。」

b. nnama=a budui=nu rensjuu asi **ufu**.

now=TOP dance=GEN practice do RES

「今は、踊りの練習をした（もうしてある）。」

活動動詞の表す出来事が主体の意志的な動作によるものではない場合、結果の状態が明示的に与えられるか否かで *ufu* の許容度は異なる。(10-a)では「雨が降った」結果として地面の湿りという明確な結果があるため使用可能だが、(10-b)では「日が照った」結果としての状態がはっきりせず許容されない。

(10) a. (キビ植えをするかどうか聞かれて:)

ami=nu=du ffi **ufu**.

rain=NOM=FOC fall RES

「雨が降った。」(だから、キビが植えよう)

b.*kjuu=ja tida=nu=du pikari **ufu**.

today=TOP sun=NOM=FOC shine RES

「今日は日が照った。」

なお、活動動詞では結果としての対象の存在が要求されないため、経験的パーフェクトも *ufu* で表せる。

到達動詞 (Achievement verbs) は、動作の完了により主体の結果を合意するため、結果相の *ufu* が使えそうに思える。しかし、この方言では到達動詞の結果相は、(日本語のイルのように) *ui* によって表され、*ufu* を使うと非文法的である。このタイプの動詞では、経験的パーフェクトも *ui* が好まれる。

(11) a. nnama=a kii=nu=du toori **ui**.

now=TOP tree=NOM=FOC fall.over RES

「今、木が倒れている。」

b.*nnama=a kii=nu=du toori **ufu**.

now=TOP tree=NOM=FOC fall.over RES

「今、木が倒れている。」

状態述語 (State predicates) は状態変化を伴わず、よって結果相の *ufu* は使うことはできない。*ui* は衣畑 (2018) で議論されているように、その状態が一時的に実現していることを表す。

(12) nnama=a juu=ja atsi-kari=du **ui**.

now=TOP hot.water=TOP hot-ACOP=FOC PROG

「今、湯が熱くなっている。」

この *ui* は「熱い」という性質を項として取り、その持続時間を短くしているように見える。だとすると、*ufu* も「熱い」という性質を取りその終了後を与えても良いように思われるが、状態述語を取る *ufu* には次に見るモーダルな意味が必ず付き纏っている。

4.2 推測用法

結果相用法の *ufu* は達成動詞、活動動詞とのみ使われるが、到達動詞や状態述語と *ufu* が共起する例がないわけではない。しかし、そのような場合、*ufu* は必ず「推測」の意味を伴っている。たとえば、目の前で木が倒れている場合には(11-b)のように *ufu* は使えないが、倒れている現場にいて、それを推測している(13-a)のような場合は *ufu* の使用が許容される。また状態述語でも自身が昔の宮古の水を味わっていれば使えないが、間接的な証拠から推測する場合には(13-b)のように言える。

(13) a. kinu=nu taifuu=basi kii=nu=du toori **ufu**(=padzi).

yesterday=GEN typhoon=CSL tree=NOM=FOC fall.over CONJEC=CONJEC

「昨日の台風で、木が倒れているはずだ。」

b. ikjaan=nu Mjaaku=nu mit=tsa mma-ari=du **ufu**.

old.days=GEN Miyako=GEN water=TOP tasty-ACOP=FOC CONJEC

「昔の宮古の水はおいしかったはずだ。」

以上のように推測用法の *ufu* は、結果相用法のない到達動詞、状態述語に明確に認められるが、では、結果相用法の *ufu* が使える達成動詞、活動動詞についてはどうなのだろうか。実はこのことを面接調査で確かめるのは難しい。その要点を述べると、達成動詞、活動動詞で推測を表す場合、話者は解釈を明示するために推量を表す接語 *padzi* を付けることを好み、結果として *ufu* が結果相用法なのか推測用法なのかが見分けられないのである。しかし、結果相用法と推測用法はその意味解釈だけでなく、テンスに違いがあり (5.2節)、言及時が過去の時、結果相用法では過去接辞の *-dai* を取らなければならないが、推測用法では逆にそれを付けることができない (cf. かりまた 2013)。(14-a)は達成動詞を取り、意味的にも推測が入らない結果相用法の例であり、(14-b)は到達動詞で推測用法の例である。

- (14) a. kinu jaa=i ngii-daraa=du satapanbun=nu agi **ufu-tai**.
 yesterday home=ALL back-COND=FOC doughnut=ACC fry RES-PST.
 「昨日家に帰ったら、サタパンピンが揚げてあった。」
- b. taifuu=basi=du kinu kii=nu toori {**ufu**/***ufu-tai**}=padzi.
 typhoon=CSL=FOC yesterday tree=NOM fall.over {CONJEC/CONJEC=PST}=CONJEC
 「台風で、昨日は木が倒れたはずだ。」

この推測用法の *ufu* が過去接辞を取れないという性質を元に談話テキストを見ると、明確に過去のことについて語りながら、過去接辞の付かない達成動詞、活動動詞の例が見られる。次はその1つである。

- (15) (第2次大戦後、少年が手榴弾をいじっていて亡くなった話)

A: (in Japanese) nakunat-ta. terjuudan. owat-te=kara are=o izit-te bakuhatsusi-te
 die-PST grenade finish-GER=then DEM=ACC play-GER explode-GER

B: urju=u=du nezju=u panasi **ufu**=sai.

DEM=ACC=FOC screw=ACC remove CONJEC=SFP

「ネジを離したんだろう。」

(SC₁₉₂₇)

推測用法の *ufu* がモーダルな意味を持つすると、アスペクトの意味による動詞分類によってその使用が制限される理由はなく、達成動詞、活動動詞に推測用法が使われていても不自然ではない。

5 文法化

5.1 モーダルの意味の発達

結果相を表すアスペクト形式が推論的エヴィデンシャリティの意味を発達させることは、通言語的に見られる (Comrie 1976, §5.2.2.1, Bybee et al. 1994, §3.15, Aikhenvald 2004, §9.1.3 etc)。このことを Bybee et al. (1994) は次のように述べている。

(T)he resultative indicates that a state exists due to a past action. This meaning is very close to the evidential meaning of an inference from results, which indicates that a past action is known or inferred on the basis of a current state. (p. 96)

「現在の状態」から「過去の行為」を推論するためには、後者が前者を引き起こすことが十分合理的でなければならない。サタパンピンを例に取るならば、サタパンピンを揚げることがサタパンピンの存在を引き起こすという因果関係があるため、後者から前者の行為(「おばあがサタパンピンを揚げた」)を(適切な文脈を加えて)推論することができる (Takubo 2009, Davis and Hara 2014)。

このような因果関係が存在する推論的エヴィデンシャリティの例は *ufu* の推測用法にも多い。たとえば次の(16)では、*ufu* を使って推論する背後に、「心の悪いおばあである」ことが「ひどい折檻をする」ことを引き起こすという因果関係がある。そして娘をドラムカンの中に閉じ込めるというひどい折檻したという事実があり、そこから、話者は「心の悪いおばあだった」ということを *ufu* を使って推論してる ((16)は *ufu* が状態動詞に付いており、推測用法の例である。以下同じ)。

(16) (娘に折檻をした (今は亡くなっている) おばあについて:)

nootsi=nu andzi=nu ssaf-fu uda=a patarafu=ka=tsi jana kimutsi
how=GEN such=GEN terrible.thing=ACC REFL=TOP work=Q=QUOT bad heart
obaa=du ari **ufu**=padzi.
old.woman=FOC COP CONJEC=CONJEC

「どうしてそんな恐ろしいことをその人がしたか」と、悪い心のおばあだったはずだよ。」

(F₁₉₂₆)

しかし、推測用法の *ufu* の全ての例に、同じように出来事の因果関係が認められるわけではない。たとえば次の(17)は、話し手が魚網を買った年を単に思い出そうとしている文脈であり、娘が実家に帰って来た年であることと、魚網を買ったことが因果関係にあるとは言にくい。

(17) (いつ漁網を買ったか思い出そうとして)

kari=ga=du kisi=nu tusi=n=du ari **ufu**=rjaa? am=mu futaa-tsi kai=juu.
DEM=NOM=FOC come.PST=GEN year=ADV=FOC COP CONJEC=Q net=ACC two-CLF buy.PST=SFP

「あの子 (自分の娘) が帰って来た年だったかな? 網を2つ買ったよ。」 (M₁₉₂₆)

さらに *ufu* が推論的エヴィデンシャルティ専用の形式なら、話し手の周りにある何らかの証拠に基づいてその原因を推測するが、(17)は自身の記憶を探索したに過ぎないように見える。

Aikhenvald 2004, §4.2, 5.1 は、推論的エヴィデンシャルティは、特に証拠に基づかない想定的エヴィデンシャルティへ、さらには可能性や話し手の疑いを表す認識的モダリティへと発達することを述べているが、(17)のような例が認められることは、*ufu* が推論的エヴィデンシャルティを超えて、このような領域にまで意味を変化させていることを示している。

5.2 テンス的意味の発達

4.2節で過去接辞の *-dai* が *ufu* に付かないことを見た。同様のことを示す状態動詞の例を(18)に挙げる。

(18) (話し手が森への小道が**手入れされていた**のを思い出して:)

kanu ntsi=nu kama=n=du paa=nu ari {**ufu**/**ufu-tai*}.
DEM road=GEN there=LOC=FOC grave=NOM exist {CONJEC/CONJEC-PST}

「あの道の向こうに墓が**あった**はずだ。」

この例では推論の証拠となる出来事が過去のものであり、そこから推測される出来事も過去のことであるが、過去接辞を付けない *ufu* が使われる。このように *ufu* が過去接辞を取れないことは、文法化によく見られる脱範疇化が起こっていると言えるが、同時にこのように *ufu* が過去の出来事を言及時として使えるのは *ufu* 自体に過去テンス的意味があるからだと考えられる。

一方、現在の出来事を証拠として推論を行う場合はどうだろうか。現在の出来事から未来や現在を推論することは論理的には可能であるが、ここでも *ufu* を使うことはできない。(19)は現在の出来事から未来を推測するパターンである。

(19) (今まさに森への小道を手入れしているのを見ながら:)

*unu ntsi=nu kama=n=du paa=nu ari **ufu**(=padzi).
DEM road=GEN there=LOC=FOC grave=NOM exist CONJEC(=CONJEC)

「(何年かしたら) この道の向こうに墓があるはずだ。」

(20)は現在の出来事 (状態) からその背景を推論する例である。話者によると推論された出来事は過去の出来事でなければならず、*ufu* を使った場合「現在墓がある」という意味にはならないと言う。

(20) (森への小道が**手入れされている**のを見て:)

unu ntsi=nu kama=n=du paa=nu ari **ufu**.
DEM road=GEN there=LOC=FOC grave=NOM exist CONJEC

「この道の向こうに墓があった (*ある) はずだ。」

(20)で「墓がある」という出来事が「小道が手入れされている」という出来事に先行しているのは、一見、結果相を表すアスペクトの用法で動作（出来事時）が結果（言及時）に先行しているのに似ているように見える。しかし、推測用法では(18)のように「墓がある」という出来事（原因）と「小道が手入れされている」という出来事（証拠）はオーバーラップしていても良い（(16)も参照）。よって、(20)で「墓がある」が過去でなければならないのは、*ufu* 自体が出来事を発話時以前に位置付けなければならないという制約を持つためである。発話時を基準にしているという点で、これも *ufu* がテンス的意味を持っている証拠と見ることができる。

5.3 統語と意味のミスマッチ

以上に見てきた *ufu* の意味の発達と、宮古狩俣方言の動詞複合体の構造を考えると、*ufu* はアスペクトではなく、テンスやモダリティのスロットに現れることが期待される。しかし、狩俣方言の *ufu* は統語的にアスペクトのスロットに留まったままである。

このことを示す前に、エヴィデンシャリティについて触れておきたい。(2)の中にはエヴィデンシャリティのスロットがないためである。エヴィデンシャリティは、認識的モダリティの一種と見なされることも (Izvorski 1997; McCready and Ogata 2007; Matthewson et al. 2007 など)、独立したカテゴリとされることも (de Haan 1999; Aikhenvald 2004; Davis and Hara 2014 など) ある。宮古狩俣方言において報告的エヴィデンシャリティはモダリティのスロットを埋めるが、1つの言語で異なるエヴィデンシャリティは異なる統語的位置に現れるとも言われる (Aikhenvald 2004, §3.3-4)。よってここではエヴィデンシャリティのスロットについては詳しく吟味せず、沖縄首里方言との比較から、宮古狩俣方言の結果相形式 *ufu* が統語的に発達していないことを示す。

沖縄首里方言でも結果相からエヴィデンシャリティへの変化が見られる。次はArakaki (2010, 82) からの例である（_{1,2,3} の添字は引用者による）。

(21) Kimiko ja juubaN nic-ee₁-tee₂-N tee₃.

Kimiko TOP dinner cook-RES-M-DIR INF

「キミコは夕飯を作ったはずだ。」

-tee₁（頭子音が先行子音によって脱落）は結果相を表すアスペクトの-teeである。-tee₂、-tee₃が議論はあるが (Shinzato 1991; Davis 2017) エヴィデンシャリティの tee であり、-tee₂ はテンスのスロットを占めるとされる。-tee₃ はよって、テンスの外側のスロット、すなわちモダリティのスロットにいると考えられる。これらは-teeの意味の発達により、それが占める統語的位置が変化しているのを示している。

対して狩俣方言の *ufu* は決してアスペクトの形式と決して共起することはない。

(22)*Yooko=ga=du juui=zu nii {uri/uki} ufu(=padzi).

Yoko=NOM=FOC dinner=ACC cook {PROG/RES} CONJEC(=CONJEC)

「ヨーコが夕飯を作ったはずだ。」

これは推測用法の *ufu* もまだアスペクト・スロットに留まっているとすれば簡単に説明できる。

さらに、Davis (2017) によると、沖縄語の-teeは敬語の前に現れるか後に現れるかで、アスペクトか、エヴィデンシャリティかが区別されると言う。エヴィデンシャリティは、敬語の後にのみ現れる。これに対し、推測用法の *ufu* は敬語に先行して現れる。次は状態動詞の例で推測用法の *ufu* だが、敬語の後に現れると文として非文になることを示している。

(23) kanu obaa=ja kimu kagi obaa=du {ari uk-amai /*ar-amai

DEM old.woman=TOP heart beautiful old.woman=FOC {COP CONJEC-HON /COP-HON

ufu}=padzi.

CONJEC}=CONJEC

「あのおばあは心の綺麗なおばあでいらっしやったはずだ。」

よって *ufu* はまだアスペクト・スロットにしがみついて離れていないことが分かる。

6 さいごに

なぜ意味変化は統語変化よりも先に起こるのだろうか。そこには意味が統語に比べて複雑であることが関係していると思われる。1つの統語スロットに対して複数の意味が表現されるのが普通であり、これらは「1対多」の関係にあると言える。とすると、先に意味変化が起きても、それがどの統語位置で実現されるかは予測がつくのにに対し、先に統語変化のみが起ると意味は（統語位置のみからは）予測できない。言語変化がスムーズに進むためには、コミュニティの次の世代で変化が共通した方向に向かう必要があり、意味変化を予測し難い統語変化だけが、その意味変化より先に起こることは難しい。

本発表で示したデータ、及びここで考えた理屈から、文法化においては意味変化が先に進行するとすると、純粋に統語的な観点から文法化を説明するのが難しいことが帰結する (Vincent and Börjars 2010, §4 の議論も参照)。Roberts and Roussou (2003) では「構造の単純化」を文法化が起こりやすい要因とし、また、van Gelderen (2004) は「時差併合 (late merge)」という統語操作が「スコープの拡大」を動機づけているとする。しかし、ここで見た狩俣方言の文法化のように意味変化のみが起こっている場合、その変化に統語変化は関係がない。もし統語的要因が文法化の方向性を決めているなら、意味変化のみが起こる場合「スコープの縮小」があつて良いことになるが、実際はモダリティからテンスや、テンスからアスペクトといったカテゴリへの変化は見られない。よって「スコープの拡大」はすでに意味変化によって動機づけられていると見なければならない (cf. Haspelmath 1999)。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra (2004) *Evidentiality*, Oxford: Oxford University Press.
- Arakaki, Tomoko (2010) "Evidentials in the Shuri Dialect of Luchuan (Ryukyuan)," Ph.D. dissertation, The university of Edinburgh, Edinburgh.
- Bybee, Joan L., Revere D. Perkins, and William Pagliuca (1994) *The evolution of grammar: Tense, aspect, and modality in the languages of the world*, Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Davis, Christopher (2017) "Evidentiality, Maximize Presupposition, and Gricean Quality in Okinawan," in Lamont, Andrew and Katerina Tetzloff eds. *Proceedings of NELS 47(1)*, NELS, pp. 229–242.
- Davis, Christopher and Yurie Hara (2014) "Evidentiality as a causal relation: A case study from Japanese *youda*," in Pin 6, Christopher ed. *Empirical issues in syntax and semantics 10*.
- Denison, David (2010) "Category change in English with and without structural change," in Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale eds. *Gradience, gradualness and grammaticalization*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 105–128.
- Francis, Elaine J. and Etsuko Yuasa (2008) "A multi-modular approach to gradual change in grammaticalization," *Journal of Linguistics*, Vol. 44, pp. 45–86.
- van Gelderen, Elly (2004) *Grammaticalization as economy*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- de Haan, Ferdinand (1999) "Evidentiality and epistemic modality: Setting boundaries," *Southwest Journal of Linguistics*, Vol. 18, pp. 83–101.
- Haspelmath, Martin (1999) "Why is grammaticalization irreversible?" *Linguistics*, pp. 1043–1068.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*: Cambridge University Press.
- Hengeveld, Kees (2011) "The grammaticalization of tense and aspect," in Heine, Bernd and Heiko Narrog eds. *The Oxford Handbook of Grammaticalization*: Oxford University Press, DOI: 10.1093/oxfordhb/9780199586783.013.0047.
- Hengeveld, Kees (2017) "A hierarchical approach to grammaticalization," in Heine, Bernd and Heiko Narrog eds. *The grammaticalization of tense, aspect, modality and evidentiality: A functional perspective*: Mouton de Gruyter, pp. 13–37, DOI: 10.1515/9783110519389-002.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (2003) *Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press, 2nd edition.
- Izvorski, Roumyana (1997) "The Present Perfect as an Epistemic Modal," in Lawson, Aaron ed. *Semantics and Linguistic Theory 7*, Ithaca, NY: Cornell University, pp. 222–239, DOI: 10.3765/salt.v0i0.2795.
- Matthewson, Lisa, Henry Davis, and Hotze Rullmann (2007) "Evidentials as epistemic modals: Evidence from St'át'imcets," *Linguistic Variation Yearbook*, Vol. 7, pp. 203–256, DOI: 10.1017/livy.7.07mat.
- McCready, Eric and Norry Ogata (2007) "Evidentiality, modality and probability," *Linguistics and Philosophy*, Vol. 30, pp. 147–206, DOI: 10.1007/s10988-007-9017-7.
- Narrog, Heiko (2012) *Modality, Subjectivity, and Semantic Change: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford: Oxford University Press.
- Roberts, Ian and Anna Roussou (2003) *Syntactic change: a minimalist approach to grammaticalization*: Cambridge University Press.
- Shinzato, Rumiko (1991) "Epistemic properties of temporal auxiliaries: a case study from Okinawan, Japanese and Old Japanese," *Linguistics*, Vol. 29, pp. 53–77.
- Takubo, Yukinori (2009) "Conditional Modality: Two Types of Modal Auxiliaries in Japanese," in Pizziconi, Barbara and Mika Kizu eds. *Japanese Modality*: Springer, pp. 150–182.
- Vincent, Nigel and Kersti Börjars (2010) "Grammaticalization and models of language," in Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale eds. *Gradience, gradualness and grammaticalization*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 279–299.
- かりまたしげひさ (2013) 「琉球宮古島野原方言の間接的エヴィデンシャルティ」、『日本東洋文化論集』, 第 19 卷, 15–28 頁.
- 衣畑智秀 (2018) 「存在型アスペクトの文法化のバリエーション—宮古狩俣方言からの示唆—」, 岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太 (編) 『バリエーションの中の日本語史』, くろしお出版, 69–88 頁.
- 衣畑智秀・林由華 (2014) 「琉球語宮古狩俣方言の音韻と文法」, 『琉球の方言』38, 法政大学沖縄文化研究所, 17–49 頁.